愛媛大学教育学部紀要　第69巻　68-77　2022

大学生における自我同一性の形成に
ファッションが与える影響

（学校教育教員養成課程）　岡本和真

（愛媛大学教育学部）　相模健人

The Influence of Fashion on the Formation of Self-identity in College Students

Kazuma OKAMOTO and Takehito SAGAMI

（2022年9月1日受付・2022年10月19日受理）

キーワード：自我同一性(identity of the ego),ファッション(fashion),M-GTA

要旨

近年,個性の尊重が謳われている中,現代青年である大学生 のアイデンティティの問題が問われている。そこで,本調査では A 県内に通う大学生 5 名に対して,現在までの成長過程とファッションの関わりを思い出してもらい,インタビューした。インタビュー逐語録を利用し,インタビューは修正版グラウンテッド・セオリーで分析した。その結果,調査協力者には,自身の恰好が周囲から浮いている,ファッション面において,取り残されているなど,周囲に対して自身が取り残されていることを感じることへの危機感をきっかけに自我同一性の模索が始まる傾向が分かった。また,自身のファッションスタイルの模索の過程で,自身の意志をファッションに反映させている調査協力者や人目を意識しコーディネートを行う調査協力者に分かれており,これらの傾向が自身の自我同一性にも影響している可能性があることが明かになった。

Ⅰ．はじめに

初めに青年期において自我同一性の課題が挙げられる。鑪（2014)は以下のように自我同一性(ego identity)について「アイデンティティという概念には、「自己」や「個」の内容とともに、人間が社会的（対人関係的）適応のために行う「自我の総合機能」という点や、この社会における「他者との連携」という内容も、大切な要素として、すなわち、アイデンティティというものは、本来、他者を無視して自己や個を主張するという内容を持つ概念でなく、また、個人主義や集団主義などの文化に依存するものでもなく、むしろ（無意識も含めて）人間が社会（対人関係）への適応を行うための総体を意味すると考えるべきなのである」と説明している。

また,白井(2011)は「個人的アイデンティティ(personal identity)とは、自分自身が変化しても同じ人間であるという自覚［連続性(continuity)］と、自分が他の誰かではない自分自身であるという自覚［斉一性(sameness)］からなり、しかも他者からもそのようなものとみなされていることをいう。そして、それが社会的に定義されたものへと成長しつつあることをアイデンティティ(ego identity)という」と説明している。

次に自我同一性について自我同一性地位や現代の課題が考えられる。

自我同一性地位とは,Marcia(1966) が青年期のアイデンティティの状態を危機を経験したことがあるか,したことがないか・積極的に関わったことがあるかの程度の２つの基準をもとに４つの地位に分類したものである。

以上の二つの基準を踏まえ,同一性達成地位・モラトリアム・早期完了・同一性拡散地位の４つの地位に関して,無藤(1979) は以下で説明している。

・同一性達成地位：自分にとって意味のある危機を経験し,自分の信念に基づいて行動している状態。

・モラトリアム：危機の最中で,自分の信念に基づいた行動をしようとしている状態。

・早期完了：危機経験はないが,自分の信念に基づいた行動をしている状態。

・同一性拡散地位：危機経験もなく傾倒もないため,自分とは何者なのかわからない状態。

これら４つの段階を踏んでアイデンティティが確立される。

上記の 4 つはある段階を経てから,次の段階を経るということはなく,モラトリアム・早期完了・同一性拡散地位をいききしながら,最終的に同一性達成地位にたどり着く。青年期はこの行き来する時期であり,森・河村(2001)は上記の研究が行われた 80 年代と現在では,置かれている環境の変化が大きく,大学生の同一性地位の諸特徴も変化していると述べている。

自我同一性地位の現状として,石田(2014) は,今日では,「アイデンティティ」という言葉が普遍的になり,「自分らしさ」の探求は日常化し,人々の生き方に大きな影響を与え,現代の日本は価値観が多様化し,ライフスタイルの選択肢が増えたことで,オリジナルの個性を志向しながら,同一性達成に向かっていると述べている。また,この志向が青年期を超えて,成人期や老年期にも「自分らしく生きること」を探求していると現状の自我同一性及び,自我同一性地位の現状に関して,説明している。

以上,自我同一性地位が置かれている現状について説明したが,このことから,時代の環境によって,自我同一性に関する考え方が変わり,期間も大きな影響を受けていることが分かった。また,鑪（2014）は「アイデンティティという概念が示す内容は非常に幅広くかつ奥深さを有している」と述べている。また「わが国にまた世界においても,今後アイデンティティに関する実証的研究は,いくらでも必要になるし,そうしたことについて研究を積み重ねていく重要性に気づくはずである」と述べている。このことから,自我同一性の性質や置かれている時代の環境によって,とらえ方やプロセスが変わっていくため,自我同一性地位の研究を行っていく必要がある。

では,青年期の自我同一性形成にファッションはどのような影響があるのか。モラトリアム期に関わらず,青年期にあたる人々にとってのファッションはどのような存在意義を示すのか。岩田(2006),石田(2014)が述べていたように,現代の自我同一性のありようとしては,相手によって立ち振る舞いを変え,それぞれに存在する「自分」を肯定していくことが現代の生き方として,相応しいという「多元的アイデンティティ」が根底としてある中で,価値観が多様化し,ライフスタイルの選択肢が増えた結果,「自分らしさ」というオリジナルの個性を志向しながら,同一性達成に向かう青年が増えている。このことから,相手によって,立ち振る舞いを変えるということは,服装にも垣間見える要素があると考える。孫・馬場(2016)は,従来は女性の服は女性が,男性の服は男性が着るのが当たり前だったが,現代では,当然のように,男性は女性の服を着こなし,女性は男性の服装を着こなし,相手によって,服装を使い分けていると述べている。従って,オリジナルの個性を志向しつつ,多元化したアイデンティティを肯定しているのが現代の青年期の人々の特徴であることが分かる。近年,個性の尊重が謳われている中,現代青年である大学生のアイデンティティの問題が問われている。そこで本研究では,その人間の個性や印象を示す要因となるファッションがアイデンティティ形成過程に大きく関わると考え,アイデンティティ模索期であるモラトリアム期にある大学生を対象に研究し,ファッションがアイデンティティ形成に与える影響を検討する。

Ⅱ．方法

本研究については，研究協力者に説明し，研究協力者自身の意思でインタビューを中止できることや適宜休憩を挟むことなどを告げた上で，同意書にて同意を得た。また，結果の公表についても同意を得た。

2021年7月から9月にかけて,A県内に通う大学生 5 名に対して,インタビューを実施した。インタビュー項目は目的に沿って独自に作成し,【導入・基本項目】5項目,【家庭環境に関して】3 項目,【学校環境に関して】7 項目,【ファッションの意識が芽生えた時期】8 項目,【自分の服に関して】7項目,【アイデンティティに関して】7 項目,【その他】2 項目の計39項目である。

インタビュー内容を逐語録し,修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ(木下,2007,以下M-GTA)によって分析した。グラウンテッド・セオリーとは,データに根拠を持った理論のことで,データ対話型理論とも呼ばれており,証拠から論を産出する方法である（木下,2007)。

Ⅲ．結果

M-GTA の結果から，24概念と8カテゴリー

を生成した。カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめて，簡潔に文章化し（ストーリーライン），結果図を作成した。以下，　概念を『　』，カテゴリーを【　】と表記する。

1. 各カテゴリーと概念

結果から 1 つの概念を例示する。調査結果から，屋内では好きな服を着たり，自身のファッションは好きなど，自分が気に入っている服を選び，着たいと考えている。これらから，自身が好きだと感じる服を着たいと感じているため，『自身が好きな服を着たい』という概念を生成した（表 1）。

表 1　概念例『自身の好きな服を着たい』

概念 1	自分が好きな服を着たい
定義	自分が好きだと感じる服を着たい。
具体例	（B-Ⅳ③）屋内は着たい服着るし，歩き回るなら，靴はスニーカーだけど，靴はちゃんと選ぶ。 （B-Ⅵ④）自分の好きなもの着てるから，自分のファッションはすきだよ。 （C-Ⅰ⑤）普通に自分が好きな服着たい。 （E-Ⅰ⑤）興味っていうか，自分が着たい服を着る人。
理論的メモ	自身が好きだと感じる服を着たいと考えている。

表 2　カテゴリー例【ファッションにおける意志の反映】

カテゴリー名	ファッションにおける意志の反映
定義	自身の意志をもとに行動し，ファッション価値観にも反映されている。
具体例	概念 1『自分が好きな服を着たい』 概念 24『自身の意志の下に行動できる』
理論的メモ	概念 1：自身が好きだと感じる服を着たいと考えている。 概念 24：やりたいことやしたいことを第一に自分の意志を中心にして，行動に移すことができている。

さらに『自分が好きな服を着たい』という概念を含み，『自身の意志の下に行動できる』という概念と合わせて，一つのカテゴリーを生成している。自分の意志で行動していることを表すものとして【ファッションにおける意志の反映】というカテゴリーを生成した（表 2）。

このように，概念の生成・修正を繰り返し行い，それに合わせてカテゴリーも生成・修正を行った。5 名分のデータ分析を終えた時点で最終確認を行い，理論的飽和に達したと判断し，最終的に 24 概念，8 カテゴリーとなった。

2.ストーリーライン(図1)

以下に示すのがM-GTA の最終的な結果となるストーリーライン及び結果図である。

調査協力者の中でも『ファッション指導を受けていない』人物は比較的家庭でも自由に過ごすことができているのに対し,厳しい家庭だったと感じている人物は『ファッション指導を受けている』傾向がある。しかし,調査協力者の大半は『親のファッションはおしゃれではない』と感じており,結果としては,『ファッションの影響を親から受けていない』と考えている。これらから,ファッション指導の有無にかかわらず,親からファッションの影響を受けていないことから,【ファッション価値観の形成にあたって親を参考としていない】ことが分かる。

調査協力者の多くは中学時代に着用していた『制服への印象』を良くなく,厳しい『校則による制限』を受けていた。しかし,高校進学の際は自身の学力で進学できる高校や資格を取得できる高校に進学していることから『内容をもとにした選択』をしており,制服や校則の内容は進学の判断基準になりえなかった。その結果,他校の制服に憧れたと感じている。対して,『進学先選択の際に制服を重視している』人物は,高校でも制服を着ることを楽しいと感じ,様々な着こなし方をしていた。このように,制服と校則が与える影響を理解できるため,【進学先の選択による制服への印象】とした。

調査協力者たちは中学進学でのコミュニティや活動範囲の拡大,高校での先輩の存在,大学進学をきっかけにファッション面で『自分が浮いている』という危機感から【ファッション意識の芽生え】ている。中学・高校在学時期に周りの友人・先輩に比べて自分がファッションを知らない,ダサいという状況から『ファッション面で自身が取り残されている』と感じている。また,大学進学がきっかけである調査協力者は私服がたりない,高校時の恰好では過ごせないなど『大学で着ることができる私服がない』と感じている。こうして,孤立している危機感を避けるために『ファッションへの興味・関心』を持ち始めた。

『ファッションスタイル形成初期の情報源』である中学・高校時代はおしゃれな友人や先輩など身近な人物のファッションを参考にコーディネートを行っていた。その後は,インフルエンサーや動画,店舗・メディアを中心にファッションに関する情報を収集するなど『ファッションスタイル形成後の情報源』をもとに,現在の自身のコーディネートを行っているため,ファッションスタイル形成期によって,【ファッションスタイル形成と情報源】は異なる。

【状況に応じた上衣中心のコーディネート】に関して,調査協力者の多くは屋内外・環境・遊び内容に応じて,自身のコーディネートを変えている。特に,屋外で活動する際は,動きやすい服,Tシャツに着替えるという考えが多く,加えて, ,Tシャツを多く持っている人物が多かったことから『コーディネートにおける上衣の優位性』が分かり,『状況に応じたコーディネート』を行う際にも,上衣を意識的に変えていることが分かる。

調査協力者は,日頃からできないことに対する危機感を持ち,早めに行動する人物や『危機感を感じて行動する』ことができるが,感じるまでは行動に移せない人物など,危機的状況を避けるために行動を移す傾向がある。また,中には周囲を意識してしまい,『危機感を感じても行動できない』と感じている人物も

存在する。その結果として,『人目を意識したコーディネート』を行うことで,自身が浮いてしまう・孤立する危機感を回避することができ,安心感を感じている。このように,周囲から孤立・浮いてしまうという危機感を感じ,人目を意識したコーディネートを行っているため,【危機感が与える行動への影響】は大きい。

調査協力者の半数は自身の服装のコーディネートを行う際に,『自分が着たい服を中心にしたコーディネート』を行っており,色の組み合わせやシンプルさなど『コーディネートにおけるこだわり』を持っている。その様子が古着を購入したり,アウターに金額をかけたりと『私服の購入の仕方』にも表れている。こうして,【着たい服を中心にコーディネートを行う楽しみ】を購入後の後悔や自身のコーディネートへの満足感を感じることで,コーディネートを楽しみとしている。

人目や周囲からの遅れ・孤立による危機感を意識しつつも,『自身の意志の下に行動できる』調査協力者が存在し,その影響が自身の着たい服・好きな服を着たいなど『自分が好きな服を着たい』という感情をつくり出している。ファッションは自身の意志を反映する手段として存在し,また,着たい服を着るという形でファッション価値観を確立しているため,【ファッションにおける意志の反映】が見られる。

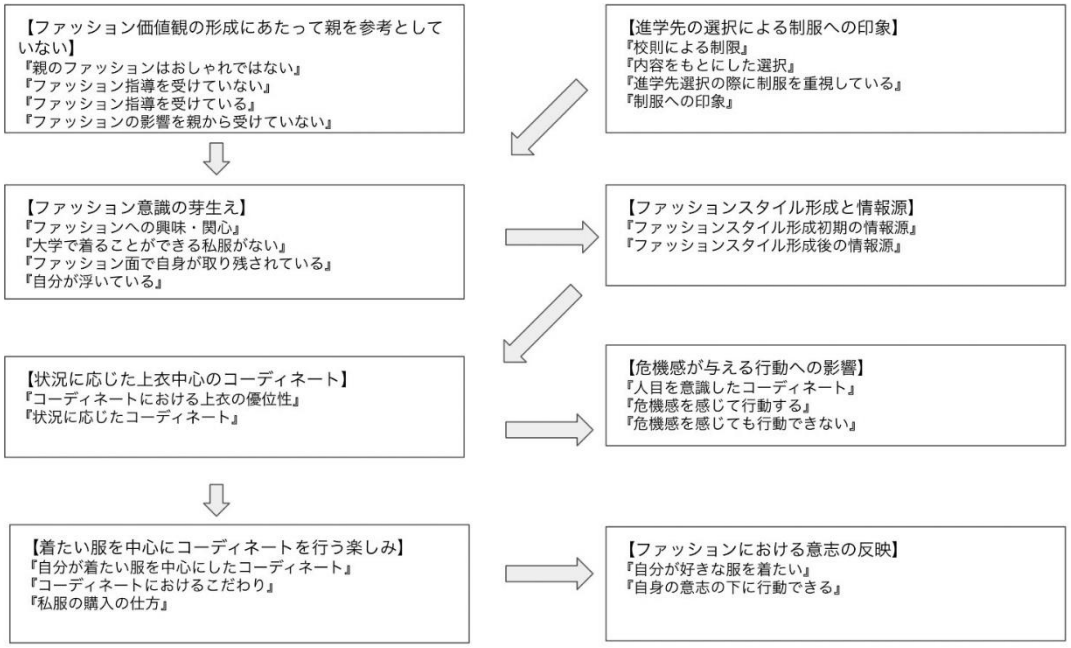

図１　結果図

Ⅳ．考察

以下,自我同一性とファッションの関係性について,M-GTA の結果をもとに考察を行う。

1.ファッションについての親からの影響

まず,自我同一性とファッションの関連としてファッションについての親からの影響について考えていく。調査協力者全員はファッションスタイルを形成する過程で親を参考にしていないことが考えられる。『ファッション指導を受けていない』の概念から 調査協力者の大半は自由な家庭環境で育ったと感じており,服装に関しても特に指導を受けることはなかった。対して,小学校までは『ファッション指導を受けている』の概念といった調査協力者も存在し,厳しい家庭環境で育ったと感じている調査協力者も存在する。しかし,最終的には親からの影響を受けていないと感じている。これは郷(2017)が子どもは母親の影響を受け,小さい頃は両親に与えられた服で育つが,思春期に入った頃から自分で選ぶ傾向が出てくると述べているように,服装に関しても思春期の開始と同時に自分で選ぶ意識を持つようになる傾向がある。さらに,山口(1991)は思春期は青年期の初期である 12, 13 歳ごろから開始し,急速に自我が発達する結果,一個人として自立しようとすると述べている。調査協力者 E は中学の進学をきっかけに親が選んだ服ではなく,自身で服装を選択し,高校でも【進学先選択の際に制服を重視している】ことから,思春期を境に親からの指導に反抗し,自身の考えを尊重するようになるため,ファッションスタイルの形成は親への反抗のきっかけになりやすいと考える。

2.危機感を持つきっかけ

次に調査協力者がファッションを通して自我同一性確立に至る危機感を持つきっかけについて考える。【ファッション意識の芽生え】をきっかけに,調査協力者全員が時期は異なるが自身のファッションに対する危機経験を中学・高校期と大学進学期の 2 つの時期で経験している。中学・高校時に自身のファッションへの危機感を経験している調査協力者は周囲の友人に比べて,服に関して何も知識がないことに危機感を感じたことがきっかけにとなり,ファッション意識が芽生えたと感じている。また,自身のファッションがダサいことで周囲から浮いてしまうことに危機感を感じた調査協力者もいる。これらから,友人や先輩など身近な人物と自身を比べて,自分が知らない・浮いているなどの危機感を持つことをきっかけに『ファッション面で自身が取り残されている』ことを自覚し,周囲の人間に追いつこうとする過程で自分らしいファッションを模索しようと考えられる。

次に,『大学で着ることができる私服がない』の概念についてアーロン・メイズラー(2018)によると,アメリカでは服装を個性の尊重を行う一手段と捉え,「制服は若者の独創性を殺してしまう」という意見を持っている。対して,四宮(2020)は日本では「制服は帰属意識を強くし,規律を守る意識が働くという考え方」と述べている。このように,日本の学校形態により,集団への帰属意識が高まってしまった結果,周りから浮いてしまうことに危機感を感じるようになると考えられる。従って,ここで指す危機感は自我同一性拡散までではないがこの危機感をきっかけに,日本では,大学進学時期にファッションに関心を持つ者が急増すると言える。

以上の 2 つの時期で危機感を持つきっかけだが,異なる時期でも自身が浮いている,何も知らないという危機感がきっかけであることは共通していることから,危機感を感じる時期は重要ではない可能性がある。平野(2005)は「人は目的を達成するために行動をし,その目的を達成するためには障害を排除していく必要がある。危機を感じる力とは,その障害に気付くために備わっている」と述べている。調査

協力者の中には,大学進学を楽しみに感じている,都市にみんなと遊びに行くといった目標を持っている人物もおり,自身が浮いてしまうことで目標達成への障害とならないように,ダサい・知らないことに危機感を感じたと考えられる。

3. 意識が芽生えたあとの行動

危機感をもとにファッション意識が形成されていく過程の中で,『ファッションスタイル形成初期の情報源』から調査協力者の大半が友人やメディアを参考に自身のファッションスタイルを形成させている。また,調査協力者の中には参考にしていた対象が友人からメディアへ変化している者がいた。これは,調査協力者がファッション意識を持ち始めた時期が中学・高校であり,ファッションモデルが身近にいたことで自身のファッション形成の際にも参考にしやすかったためではないかと考えられる。その後は,大学進学によりソーシャルメディアがより身近になったことで,情報源がメディア主体に移行したのではないかと考えられる。加えて,谷田川(2013)は「高校までの友達づくりと大学での友達づくりとでは,チャンスも関係を構築するための時間もかなり異なっている。高校まではクラス単位での学校生活となるため,クラスの中で十分な時間を使って友達との関係を深めることができるが,大学では時間的にも空間的にも自由度が高まる分,友達との出会いの場も関係を深める時間も限定的となってくる」と述べている。このように,大学進学により,友人の存在が身近ではなくなり,ソーシャルメディアが急速に普及したことで,身近に手に入る情報源が友人からメディアに変わったことがファッションに関する情報源の違いを生み出している。従って,大学進学をきっかけにファッションに興味を持ち始めた調査協力者はSNS を中心にファッションに関する情報を入手していると考えられる。

さらに,調査協力者は状況に応じてコーディネートを変化させている。『状況に応じたコーディネート』から,調査協力者の中には,活動によって,コーディネートを変えることはないが,どの人物に会うかによって,コーディネートを選択している。加えて,調査協力者全員が『コーディネートにおける上衣の優位性』を感じており,コーディネートの基準は上衣にある。そのため,上衣を中心にコーディネートを変化させることで,調査協力者は様々な状況に応じてコーディネートを作り上げている。

以上のことから,調査協力者はファッションスタイルを形成していく過程で,中学・高校在学時では,友人や先輩,大学在学時には SNS,動画等のメディアなどの身近にあるファッション情報源をモデルとし,自身のコーディネートを構成する傾向がある。そして,身近なモデルを参考にしつつも,活動する際に誰と会うかやどこで活動するかなどの自身が置かれている状況に合わせて,自身がすべきコーディネートを上衣中心に選択し,自身のコーディネートを形成していくことでファッションスタイルを形成していくと考えられる。

4. 危機感が与える行動への影響

調査協力者全員が自身のファッションに危機感を感じ,情報を取捨選択していくことでコーディネートを行っているが,『自分が着たい服を中心にしたコーディネート』を行っている調査協力者と『人目を意識したコーディネート』を行っている調査協力者が存在する。『人目を意識したコーディネート』を行っている調査協力者は,自身のファッション価値観に自信を持っていない。そのため,私服を購入する際はメディアを参考に無難なファッションを意識したり,「マネキン買い」を行ったりと自分の意志が反映されないことを重要視している。さらに,コーディネートがうまくいった際には,うれしいなど気分が高揚するのではなく,安心する,ほっとするなど安心感を感じる傾向がある。これは,調査協力者が危機感を感じないと行動しないと回答しているように,ファッションにおいて,自分が浮くかもしれないという危機感をもとに行動し,危機を回避したことで安心感を感じているため,自我同一性の達成のためのきっかけとはなり得ない可能性がある。

対して,『自分が着たい服を中心にコーディネート』を行っている調査協力者はファッションにおいて,危機感を経験している。しかし,現在では古着をコー

ディネートに取り入れたり,色の組み合わせやシンプルさを意識したりと『コーディネートにおけるこだわり』を持っている。このことから,自身が自分が着たいと思う服を着ることを中心にコーディネートを行っていることが分かる。そして,調査協力者は自身のコーディネートがうまくいく,褒められた時はうれしい,テンションが上がるなど気分が高揚する傾向がある。これらから,危機感を感じながらも,ファッションにおいて,自身の意志の下に行動することを第一に考えているため,自我同一性の達成のためのきっかけとなりうる可能性があると考える。

5. 自我同一性とファッションの関連性

以上のことから,ファッションは自我同一性を確立する１つのきっかけになりうると考えられる。今回の調査協力者全員のファッションを意識し始める要因にファッション面で自身が取り残されているという危機感を感じていることがある。そして,ファッションスタイルを形成していく中で,参考にする情報や実際に活動する状況に応じて,コーディネートを模索し,自身のファッションを使い分けていることから,橋本(2014)が述べる「変化しながらも同じであり続けようとする」アイデンティティ形成の一面も表れている。また,ファッションに関する模索をしていく中で,自分のファッション価値観に自信が持てず,第三者のファッション価値観を真似ることで,自身がダサいことで周囲から取り残されてしまうしまうことを回避している調査協力者が存在した。この調査協力者は無藤(1979)が定義づけている「危機の最中で,自分の信念に基づいた行動をしようとしている状態」にあるため,モラトリアムに該当する可能性がある。対して,自身が着たいと感じる服を中心にコーディネートを行っている調査協力者は,ファッションに関する危機感を感じながらも,現在では,自分が着たいと感じる服をコーディネートに取り入れているため,ファッションに自身の意志が反映されている。このことから,無藤(1979)が定義づけている「自分にとって意味のある危機を経験し,自分の信念に基づいて行動している状態」であると考えられるため,同一性達成地位を達成している可能性がある。

このように,ファッションを意識し始め,自身のファッションスタイルを模索し,形成していく過程は石田(2014)が述べている現代の価値観の多様化によるオリジナルの個性を志向する,「自分らしさ」を探求する過程に当てはまるため,自我同一性の形成を表す一過程になりうると考えられる。

6. 今後の課題

今後の課題としては,事例が少ないことやファッションと自我同一性の関連についての研究が少ないことがあげられる。また,尺度を使いながら,直接関連が見られるかについて調査研究を行っていく必要性や本研究では職業アイデンティティに関しては検討をできていないため,20 代後半の現代青年を対象に検討を行っていく必要がある。

引用文献

(1)アーロン・メイズラー　2018　小学生に高級服は不適切？ アメリカの学校で制服導入が進むワケ【世界の制服：アメリカ編】
https://docs.google.com/document/d/1F8SGXTBJFraMUawDy1zRePNwBZnRq6jp/edit#
2021 年 12 月 3 日確認
(2)郷たえこ　2017　親の服選びが子どもに影響を与える
https://ameblo.jp/x001800x/entry-12268663373.html
2021 年 11 月 24 日確認
(3)橋本広信　2014　4 章 (3) B　時代,歴史を生きる人間のアイデンティティ　宮下一博・谷冬彦・大倉得史（編）2014　アイデンティティ研究ハンドブック　- Handobook of Identity Research　ナカニシヤ出版　211 - 219.
(4)平野敏右　2005　第 10 回　平野敏右　学長「現代の危機管理意識，行動規範」
https://www.cis.ac.jp/research/satellite/popup/0510.html
2021 年 11 月 24 日確認
(5)石田弓 2014　4 章　(1) B さまよえる青年の心:

アイデンティティの病理：発達臨床心理学的考察 宮下一博・谷冬彦・大倉得史（編）2014　アイデンティティ研究ハンドブック　－Handobook of Identity Research　ナカニシヤ出版　126-134.
(6)岩田考　2006　若者のアイデンティティはどう変わったか　浅野智彦（編）2006　検証・若者の変貌－失われた10 年の後に－ 勁草書房　151-190.
(7)木下康仁　2007　ライブ講義 M-GTA　弘文堂
(8)Marcia. J . E . 1966 Development and validation of ego-identity status. Journal of Personality & Social Psychology, 3, 551-558.（鑪幹八郎(編)1998「アイデンティティ・ステイタス」の開発と確定 アイデンティティ研究の展望５－１ ナカニシヤ出版　から引用）
(9)無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性　教育心理学研究, 27, 178-187.
(10)森美海子・河村茂雄 2001　大学生における自我同一性地位と充実感に関する一研究　岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 (11), 115-125.
(11)白井利明　2011　成人前期と中年期のアイデンティティ発達に関する研究課題　大阪教育大学紀要 第 IV 部門 教育科学 59(2), 123-138.
(12)四宮淳平　2020　制服ってなぜ着るの？
https://www.nishinippon.co.jp/item/n/612680/
2021 年 12 月 3 日確認
(13)孫珠熙・馬場弘朗　2016　若者の価値観が被服行動に及ぼす影響：構造方程式モデリングによる検討　人間発達科学部紀要 第 11 巻第 1 号 157－174.
(14)鑪幹八郎 2014　序文　宮下一博・谷冬彦・大倉得史（編）2014 アイデンティティ研究ハンドブック －Handobook of Identity Research　ナカニシヤ出版　6.
(15)谷田川ルミ　2013　大学への適応における友人関係の重要性－高校までとは異なる人間関係をどのように構築するか ベネッセ教育総合研究所
https://berd.benesse.jp/berd/focus/4-koudai/activity2/
2021 年 11 月 24 日確認
(16)山口雅史 1991　反抗期　山本多喜二（監修）発達心理学用辞典 259,北大路書房